



TITLE:

天の河

AUTHOR(S):

大山, 督

---

CITATION:

大山, 督. 天の河. 天界 1926, 6(68): 478-482

ISSUE DATE:

1926-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160584>

RIGHT:

# 天　　の　　河

京　城　大　山　督

青く澄んだ空には  
美しい星がびかびか輝いてゐる  
あそこへわたしはこの唇をおしつけたい  
さうしてはけしく泣いて見度い

あの星はわたしの愛する人の眼だ  
絶えず瞬き乍らかゝやいて  
わたしにやさしく挨拶する  
青く澄んだ大空から……………

……………(ハイネ——生田春月譯)

『人間の眼』つて不思議なものです。土の堆高きにすぎざるを見て、直ぐ英雄の偉容をうつろへ、花位るにすぎざるを見て、はや乙女の顔をおもひうかべる……それ云ふのも、此の眼なるものに情緒を稱する頗るミステリアスなグラスがあつて、もの皆このグラスを透すとき、得も云はれぬデリケートな作用を其處に起すからではないでせうか。ある詩人は曾てこれを『死ぬここのある美しい星』だご申しました。『死ぬここのある美しい星』然らばこの『死ぬここのある美しい星』が先づ死なゝいご云つてよい天つみ空の星々瞬きを交し始めたのは何時頃の事かご申しますのに、それはバビロンの文化よりも、エジプトの文化よりも、支那の文化よりももつこもつこ遠い昔の事だつたやうで御座います。

その頃にもこのデリケートな作用は無論あつたので、以來、實在としては熱球乃至炎塊に過ぎない筈(?)の星辰が時にさまざまな感念の對象となり情操の媒介物となつたものです。

遠く離れて逢ひたい時は、月が、鏡になればよい

ご云ふ民謡等はその好適例だご思ひます。それ許りではありません。現今、多少なりとも天文に興味を持つて居る者の情想眼には、凡ゆる個々の星々が素晴らしい魅惑な情緒を含んで映ろひ、一種異様な昂奮をさへ伴つて感ぜられるのです。そしてその最も『押迫つた魅惑』に輝くのは私は夏であるご思ひます。

オレンチがまつた濃黄色に輝くアークチウラスご云ひ、凄艶な傳説を秘めて流れゆくアリアドネの星冠、それを淵ぎる星々の燦々たるご云ひ、クワツごみひらいた野獸の眼のやうなアンターレスの赤爛々たるご云ひ、其他凡てが(薄絹の帳りのやうな、あの物柔らかな夏の夜空を透して瞬くとき)情趣的で求愛的に向ふから——つまり星そのものから仰ぎ見る者の心に押迫つて来る魅惑を

齋らして居はしないでせうか。

『押迫つて来る魅惑』……さうです。夏の星の光りには優しく懐しくも亦親しみ易い情緒が溢れこぼれて私達観望者の胸に心にヒタヒタと浸りこんでくるのです。

が、段々世の中が涼しくなつて十月の始めにもなれば今迄押迫つて輝いて居た夏の星々は次第に西の空に追ひまかれて、振り仰ぐ中天高く澄みかへる星の瞳は……ライラ座のヴェガにしろ、アキラ座のアルタイルにしろ、デルフィナスのダイヤモンドにしろ、今迄は反對に私達の魂を、詩情を、情想を惹つける魅惑をおびて宛も、私達の求める何物かを待つが如く、つんぞまとして睨き始めます。果然私達の心は彼等の思へるが儘、遠い世界に引摺られ出す。私達はすみ渡る秋の夜空の星々を仰ぐ度に彼等の魅力に惹付けられて魂ごとく肉體を離れ我を忘れてあてごもなき天界のそらろ歩きを始めるのです。

或はオルフェウスの琴に聴き惚れ、或はキグナスの悲涙に貫泣し、或ひは美しいフリジアの青年を想つて見度く或は漂らはれたトロイの少年に同情して見度り、ごもすれば巨人ティフォンを思ひつ切り憎んで見度りする。

今や小さき魂は方寸の形核を大いなる宇宙星辰の愛に溺れて夢の如く幻の如しフワリフワリミユートピアンのフェアリー・ランドを逍遙ひ歩くのです。美しき星宿の情愛は相争つてこの可愛らしき魂をむかへ、導き、歓迎して呉れます。

ですが皆さん、

皆さんは、以上の情味深き諸々の星々のなごやかな光りを仰ぐ度に必ずや皆さんの眸底を横ざまに、皆さんの魂のドン底に映じ來つて模湖として棚びく光りの帯のゆかしく、尊く、神々しくつきせぬ流れを見るごでせう。それは云ふ迄もなく天の河であつて、私の今や語らんごする處、また實にこれに外ならないのです。

星くづの、つごひて永遠に

果てしなき

果てし流るゝ天の河かな

その模湖たる、その冥然たる、何の用意もなくふご振仰ぐ私達の心を瞬間にして他愛もなくひつ攫んで否應なしに宇宙の深みへ引摺つてゆく。……大方の秋の星が、いやに惹付ける魅惑で不可抗的な微笑みを投かけるのも全くこの天の河ご云ふ本尊の及ぼす影響に過ぎないのではないかご思はれる程の素晴らしい力で罌粟粒程な私達の魂を、——宛も磁力にひかる鐵粉の如く、また長鯨に吸はるゝジャコのそれの如く、何の造作もなく易々ご宇宙の深みへ引つぱりこんでしまひます。

そこで、大いなる光彩の殿堂は私達の魂の周圍を取り圍んで不死の瞳、嬋妍

を競ひ、星辰の光愛一身を廻つてキラビやかに輝く。寶玉の無盡ミ微笑む星の姿は千差萬別、情涙を一身に鐘めて昂ぶつて見え、億萬の銀砂もちりばむ星の装ひは己れ一人の爲の装ひである。……ミ茲に至つてきゝやかなる私達の魂はそこら、こゝらに瞬く星辰をすつかり自分のお友達にしてしまつて、これが晝の中御厄介になる日輪大王の畏友であることも忘れて、話しかけ、想ひをかけ果ては追掛けて走り廻る。

あゝ寔に、宇宙の果てに打ち建てられた光りの大殿堂——天の河は私達にきよく、尊く、うるはしい魂の洗禮を與へてくれます。私達の宇宙の屋體骨である天の河は自分達一家族の一員である太陽の、仔星である地球のかすかな厘デコ内至毛ボコの上に住んで居る私達の眼前に、その偉大なる、その雄麗なる、その莊嚴なる、その神祕なる千古の美觀、萬世變らざる恣態をうつろへて居るのです。

そして、あの謎のやうな乳白色の光りの流れをみつめて居るミ、何だか

あはれ人の子よ、いさも小(ささ)やかなる存在の主よ。

このわれを解せよ、

われを解するは即ち宇宙を知るの第一歩なれば。

ミでも暗々裡に囁やいて居るやうにさへ思はれるではありませんか。

皆さん！

私達はこゝに、

『天の河が何んだ。遠くから見れば蚊の涙程にも光らんぢやあないか』等ミ云ふ生意氣千萬な威らがりを云ふのを暫らく見合せて、何も知らない、純な幼な兒の如うな氣持に立返つて、コスモスの花にでも埋もれ乍ら、この絶大なる宇宙の素晴らしい眺めを、ひみつ思ふ存分みつめて見やうではありませんか。

ぎんな感慨が涌き起るここか？ ぎんな昂奮が齎されるここか？

あゝ實に、この天の河の美しさを望んでその不朽の殿堂の探索に耽り、不滅の星靈の陶酔にひたる事の出来る私達は幸福です。ラビンドナード・タゴール翁によつて歌はれた『天の河に溢るゝ歡喜の洪水』その歡喜の洪水に身を任せ魂をひたらせて涙ぐましい程の慰安ミはち切れるやうな愉悅に生きてゆくこの出来る私達がこの世に於ける祝福されたる幸福者でなくて何でせう。

天の河が私達に與へてくれる「永遠の靈氣」それは決してこの地上に於て求めることの出来ない尊い“精神の感激”であります。天の河が私達に吹掛けてくれる「神祕の靈感」それは到底この微塵星に於て感ずることの出来ないえがたい“情緒の衝動”であります。

天の河！天の河！あゝそれは何さいふきよなる天界の魅惑の權化、何ミ云ふ不思議なる人生の疑惑の象徴なんでせう。

「宇宙ミは何ぞや」

ミ題して曾つて山本先生が書かれたお話の末尾に

…………今日のやうに、人間があつちこつちに専門を分けて仕事をして居りますけれども、され程の人、され程の地位のある人でもその思想の終局は満足に宇宙の問題が解けた時であります。

ミ云つて居られますが全くその通りだと思ひます。千種萬様ありミ凡らゆる事務に冗漫に時ミして出沒する大眞理の方影を追ふて、世の中のクエスチョンマークミ云ふクエスチョンマークが残らずピリオッドに分解されつくさない中は、眞に嚴正なる意味に於て「これが正しい」ミは云へない理窟である。同時にいくら研究しつくしても鶏卵だけではそれが決して親鳥の解剖を意味しないミ同じく、いか程地の理をきわめやうミも天の時に朦かつたならばこれをしも全き研究であるミ云ふミは出来ない。親鳥の研究が如何に重要なものであるかを知つて居る人には今更天文の有意義云爲を口にする迄もないミ思ひます。

けれども、兎角浮世はひろいもので如何かするミ「杞憂がなければ天文は要らない」位に己に極めんで居るミんだ杞人が居るのには困ります。曾て水野さんのお話に天の河に水があるかミの奇問を發した人があるさうで、成程名が河だから水があるミでも思つたものでせう。殊更オンが雨の河に通ずるのは妙ですなんて洒落て見た處で何にもなりません、それにしても斯う云ふ考へを持た儘、ラジオ入りの空氣を呼吸して居る人が動かさず居るミいふのは寔に歎かしい事です。

（前略）有窮のみを知つて無窮に對する憧憬れを持たぬものは呪はれてあれ。金錢、物慾、等、等、さうしたものゝ樂みはみんなに多くミも要するにミこまで行つても有窮だ。きりがある。きりがあるものを、きりがなく求めやうミするミところに無理が出て来る。一寸のゆミりもない。秋の空を眺めよ。秋の夜の星を眺めよ。そこに底の知れない神祕がある。この神祕が一體宇宙のミこに初まつてミこに終るか。誰も知らない。まこに無窮だ。際みのない廣い空だ。たゞその限りなく廣い空の胸に向ふミ、あらゆる人の悲しみは洗はれ、歎きは慰められる。そしてそれを憧憬れる人々の心を高くし靈をすまし、あらゆる塵界のいさこさから刹那の汚れをすつかり洗つて呉れる。そして人は、この無窮なものに對して、初めて限りのない満足を感じる。この刹那の法悅境こそは巷に惶々ミして歩いて居る人の、ミても覗き得ない別の世界でなければならぬ。そして、眞にこの歡喜に浸つた人々は、たミへ井戸へ落ちたにしても（註。星を眺めて歩いて居る井戸に落ちた昔の哲人を諷したので、この論文の初の方に書いてありました）この美しい、高い天象を眺めて居たミこをおそらく決して悔いないであらう。今日の社會は、自然ミ云へば必ず山のみをいひ、海のみを指す。天象そのものに接觸する喜びは全く度外に棄て、了はれたやうだ。（中略）秋が立つ、いたづらに惶々たる都市人よ、秋風が吹く世界のみにはせめて一夜

の詩人たれよ。”と。本年8月22日付けサンデー毎日の評壇に於て「秋が立つ」なる名題の下に千葉龜雄氏は語つて居られますが、何と皆さん！私達も亦この興味深き、氏の感想に衷心からの同感をおぼえずには居られないではありませんか。

一生涯に唯の一度もこの永遠性の表現である星辰の光涙を、天の河の魅惑を感ずることなく、あの莊嚴なる眺にすら碌々接する事なくして死んでしまふ様な人のあつたら、あゝその人は如何にか不幸でせう、恵まれざる果敢なき人生の持主でせう。それは宛も効にして孤兒院に育たねばならなくなつた人のそのやうに。

私はさう云ふ人達に一遍でいゝから、この、日輪をさへ容易く引摺つてゆく彪大なる光彩の殿堂裡に、コセコセした眼をむけチバコマツた魂を沐浴させておゝ何と云ふ無盡藏だ。

これはまあ、この無邊際は一體どうしたと云ふのだ。

それに較べて

自分が今迄考へた事した事の凡ては

何と云ふチツボケな事だつたらう！

と叫ばしてやり度い。

そして永遠から見た人生、社會、自我の如何に微塵性に富み、如何に蜉蝣性に富めるかを考へる有意義、高い處から人生を瞰下して居るやうな、屈託のない傍觀者の氣持を時折り味つて生きてゆく幸福、宇宙觀といふ大きな土臺石の上に建築された素晴らしい人生觀の貧乏搖ぎ一つせぬ氣持、絶えず或る大いなる存在に凭りかゝつて居る様な精神の安固安定、あゝそれらの幸福な天界の賜物を未だ享け得ざる人々にお頒ちしたいものです。

これから銀世界の冬夜にかけて星辰は益華々しい陣容を整へて来る。雪駄の音もチャラチャラと錢湯なんごの歸り途、フレアデスやオリオン達の懐しい姿に會へるのも、もう直きですね。お互ひに楽しいものです。

今や秋、涼風たけなはなる神無月、晚翠氏のうたはれた

銀漢高く星清く、神祕の色に包まれて、

天地微かに光る時

であります。仰望絶佳なる星靈の光の夢かゝ溶けし天の河を。では皆さん！御一緒に、心ゆく迄うつろひ眺め入りませう。

※ ※ ※ ※ ※

星くづの夢かゝ溶けて天の河

星靈淡く秋にかゝれる